

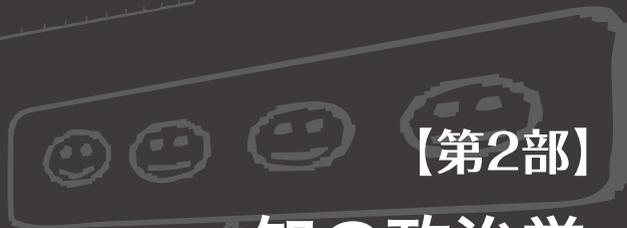
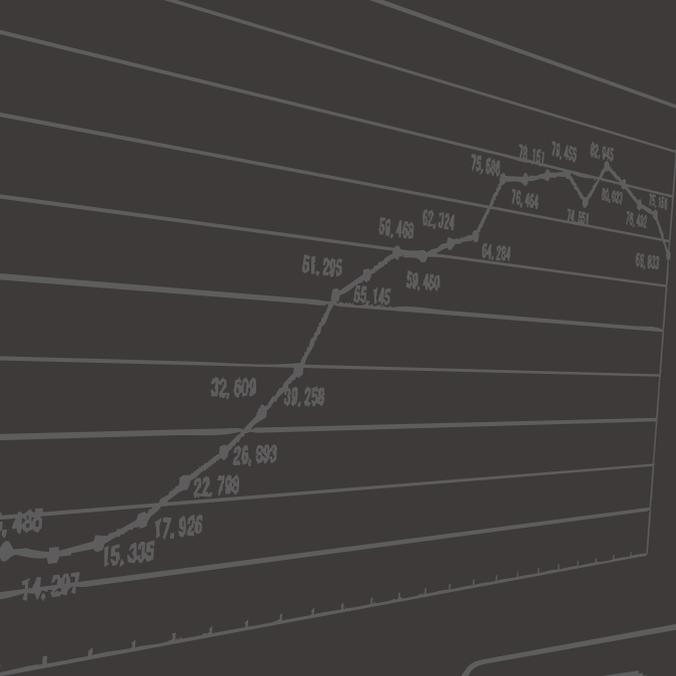


Title	第4講 オリエンタリズム (2)
Author(s)	福田, 州平
Citation	GLOCOLブックレット. 2013, 12, p. 40-49
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48278
rights	
Note	

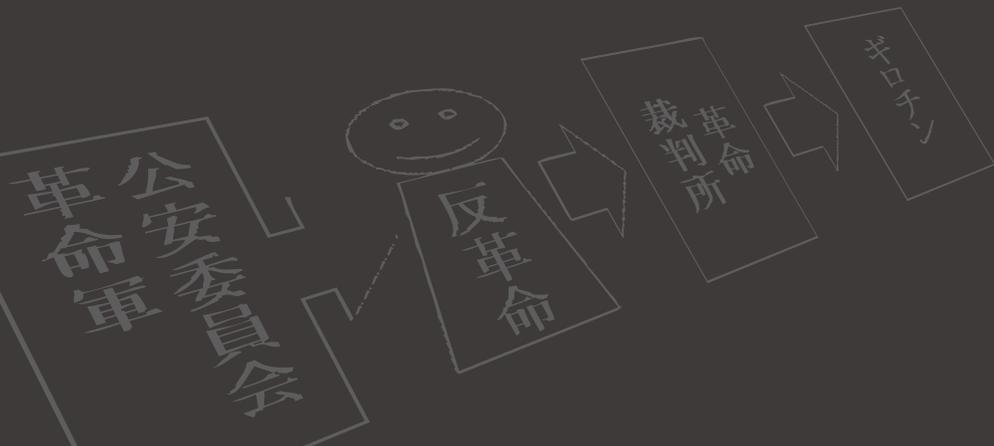
The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



知の政治学



第4講 オリエンタリズム(2)

1. 前回の簡単なまとめ

おはようございます。前回、エドワード・サイードの『オリエンタリズム』についてお話ししました。前回、サイードは、オリエンタリズムには3つぐらいの意味があるといっていますが、そのなかでも言説、つまり「知識を表明する言葉の束であると同時に、特定の権力を背景として、ある利害関係のなかで機能する言語表現」という側面を強調し、「東洋」と「西洋」も人間によってつくられたもの、「思想・形成・語彙の歴史と伝統を備えた一つの観念」だと指摘していることをお話ししました。こうした観念が事実と符合しているかどうかは、サイードの論点ではありません。サイードの論点は、こうした観念がどうやって編成されていったのか、そしてなぜそれが綿々とつづいてきて今なお力をもっているのかにあります。これを説明するのにサイードが持ち出しのが、アントニオ・グラムシという人のヘゲモニー概念なのです。今日は、まず、グラムシとヘゲモニー概念のお話からはじめたいと思います。

2. アントニオ・グラムシとヘゲモニー

さて、それでは、まずアントニオ・グラムシの生涯について触れたいと思います¹。グラムシは、イタリアの政治家であり、政治思想家です。1891年に地中海に浮かぶサルディーニャ島で生まれ、身体的な障害と一家の貧困のためかなり苦勞したようですが、20歳のときにトリノ大学へ進学します。トリノは、当時イタリアでもっとも近代的な都市だったそうです。ここで、言語学に関心をもち、社会主義運動とも接触し、やがて社会主義の雑誌で論陣を張るようになります。そして、ロシア革命が勃発します。グラムシは、ロシア革命に衝撃を受けたようで、同革命とレーニンについてつぎつぎと論文を書くようになります。政治的な立場がマルクス主義・共産主義へと移行します²。1921年にイタリア共産党が創設されますが、グラムシはこの党の執行委員となり、翌

年にはモスクワへ派遣されます。この滞在の経験から、グラムシは、後ほどご説明しますヘゲモニーの思想を得たようです。その後、ウィーンへ赴きますが、モスクワへの経験とあいまって、各国・各地域の国情の違いを痛感することになります。ウィーン滞在中に、グラムシはイタリア下院選挙に当選します。1924年5月に帰国しますが、当時イタリアではファシズムの嵐が吹き荒れていました。1926年11月、議員の不逮捕特権の「例外措置」によって、グラムシは逮捕されてしまいます。以後、グラムシは1934年の仮釈放まで獄中で暮らすことになります。獄中の厳しい生活が彼の体を蝕み、仮釈放のときにはもはや一人で歩くことができない状態だったそうです。そして、1937年、脳溢血で亡くなりました。

グラムシの思想は、長い獄中生活のなかで思索し、書き溜めていった膨大なノート(『獄中ノート』)に断片的に記されています。断片的と申ししたのは、おそらく出獄後、ノートをもとに著作を出すつもりだったためか、体系だった著作ではないからです。残念ながら、彼はノートをまとめる作業ができなかったため、獄中で著したノートを体系的に理解することは難しいといえます。それでも、方法論的な一貫性が見出せるようです。そして、彼の残した思想は、イタリアの政治思想を研究している人たちだけでなく、さまざまな分野に影響をあたえています。サイードも、グラムシの影響を受けた人間の一人だといえます。

では、グラムシの考え方を簡単に説明したいと思います。まず、グラムシは、国家が現れる形態には2つあって、それは市民社会と政治社会だと考えました。市民社会とは自己統治の世界であり、他方で政治社会とは官吏による統治の世界です。この市民社会で機能するのが、ヘゲモニーです(鈴木 2011: 68-125)。ヘゲモニーは、通常、国際政治学だと「覇権」と訳されることもあり、「ある国家が軍事力、政治力、経済力および天然資源に関して、他国を凌駕する圧倒的な支配権を確立すること」(川田・大畠編 1993: 521)を意味します。しかし、グラムシのヘゲモニー概念は、これとは意味が異なるので注意してください。グラムシはヘゲモニーを、「支配と指導、強制と同意、政治社会と市

義とは、資本主義によって生まれる矛盾に抗して、私有財産制の制限や階級的不平等の解消などによって、より公平な社会を目指そうとする理論と運動である。ユートピア的な理念として発展したが、資本主義社会の分析や運動の方法については長く論じられなかった(空想的社会主義)。しかし、19世紀にマルクスとエンゲルスは、資本主義の運動法則、および労働者が社会主義社会を実現する役割を果たすことを、唯物史観と剰餘価値説に基づいて論じた。彼らの思想は、「科学的社会主義」ともよばれたが、やがて社会民主主義と共産主義におおきく分かれた。社会民主主義とは、議会を通じて漸進的に社会主義を実現しようとする。他方、共産主義は、生産手段を共有し、また生産力を高めることで、階級も搾取もない社会をめざす。

1 グラムシの生涯については、鈴木(2011)および山崎(1966)を参照した。

2 辻編(1956)に基づき、簡単に社会主義と共産主義の概念的整理をしておきたい。社会主

民社会のかかわり」で捉え、そして「文化的・道徳的・イデオロギー的指導を意味する」ものとして扱いました(片桐編 2001: 278)。ということか? グラムシは、政治社会では国家権力による支配があり、抵抗を押さえつける強制が働くと考えます。他方で、市民社会では、ある指導者が人びとを「指導」して「同意」を得ることが大事だと捉えます。そして、ヘゲモニーとは、指導によって多くの人びとから得られた同意が長くつづくことを意味します。なお、グラムシの国家の考え方は、“国家=政治社会+市民社会”であり、「強制力のよるいをつけたヘゲモニー」(代編 1961: 207)だといっております。

もう少しお話を足したいと思います。市民社会において、指導者たちのもつある文化形態が他の文化形態よりも優位にたつと、世界観や価値観、行動スタイルなどの刷新が生じ、新しい文化アイデンティティが、指導者たちの路線に沿って形成されていきます。これを文化的ヘゲモニーといいます。指導者たちは、自分たちの立場にたつ知識人をつかって、この文化的ヘゲモニーをつくっていき、人びとからの同意獲得を容易にするのです。

サイドはオリエンタリズムの研究にあたって、グラムシの文化的ヘゲモニーに着目しました。つまり、オリエンタリズムを言説としてまとめ上げる力、そのおどろくべき持続力、そして社会経済の諸制度との結びつきは、この文化的ヘゲモニーの賜物だと考えたのです。ヨーロッパ文化は東洋よりも優れていると認識し、それが広められることで、人びとの意識や認識に大きな変化を与え、さらには植民地政策への「同意」すら獲得してしまう、これをサイドは問題だと思ったのです。

3.3つの補足説明

サイドは、前回の講義で紹介しました3つの限定条件に、さらに3つの補足をつけて、どのような考えに基づいて『オリエンタリズム』を執筆したのか、かなり念入りに読者に説明しようとしています。そこで、サイドの説明に沿って、補足をみていくことにします。

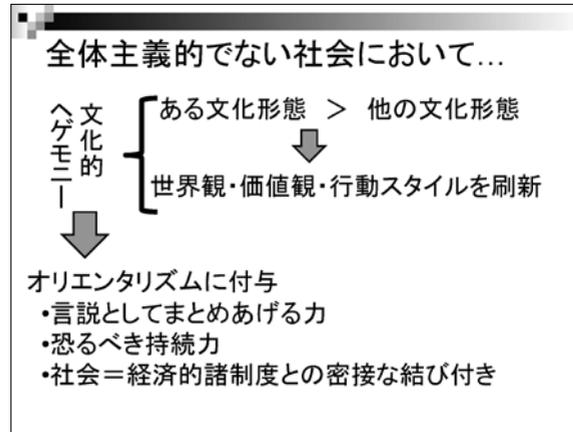


図: オリエンタリズムと文化的ヘゲモニー

3.1 純粋な知識と政治的な知識の相違

サイドは、現代の西洋で知識の大部分を多くを蝕んでいるのは、知識は非政治的であってほしいという願望であるということを言っています。現代の西洋といっていますが、おそらくこれは日本でも同じことでしょう。知識といっているもの、この多くは政治とは無縁であると、誰もが思っています。たとえば、近世日本文学の研究は政治とは無縁で、日米安保体制の研究は政治的である——こういうことは、比較的簡単なことでしょう。しかし、研究者個人がおかれた生活環境の影響一切から抜け出て、知的活動をおこなうことはきわめて難しいし、おそらく誰もできません。近世日本文学の研究は政治色は薄いかもしれない。しかし、だからといって、それが直ちに政治的ではないということの意味しないんだ、サイドがいいたいのはこんなことでした。むしろ、サイドは、あらゆる知識は政治的なんだということを主張したいのです。

「真の知識」なるもの、それが非政治的であってほしいし、そうでなければならぬと思う人は少なくないのかもしれませんが。近世日本文学の知識は非政治的だし、そうあるべきだと誰しも思っているでしょう。そのことは、政治的な知識は「真の知識」ではないと思うことの裏返しでもあります。サイドは、そうした態度を戒めているのです。なぜなら、「真の知識」が非政治的であって欲しいと願うことは、研究者が知識を生み出すときに存在する高度に組織化された政治的諸条件を覆い隠すことなんだといっているのです。その諸条件は目に見えないかもしれない。だけど知識を生み出す作業にとりかかっている研究者の周りに厳然と存在し、誰しもなかなかその影響を脱することはできないのです。

これは、オリエンタリズムを研究するオリエンタリストたちにとっても同じことです。「オリエンタリズムを研究対象とするヨーロッパ人ないしはアメリカ人が、彼らにとっての現実の主要な環境条件を否定できない」(サイド 1993: 38)とサイドはいついて、非常に重要視しています。では、しばしば不問に付される主要な環境条件とは何か? サイドが見るところ、それは「自分がオリエンタリズムに対して明確な利害関係を有する強国の国民だという自覚」であり、さらには「自分がホメロスの時代以来のオリエンタリズムへの明確な関与の歴史を担う地域に属する人間だという自覚」(サイド 1993: 38-39)だそうです。こうした自覚は、オリエンタリズムの地政学的知識をさまざまな分野に配分し、オリエンタリズムへの関心を作り出し、それを維持し、さらには精緻なものへと作り上げていきます。オリエンタリズムとは、「われわれ」とは異なる世界であるオリエンタリズムを理解し、「場合によっては支配し、操縦し、統合しようとさえする一定の意志または目的意識」そのものなのです。だから、オリエンタリズムとは、オリエンタリズムそのものよ

りも、私たちの世界のほうにこそより深い関係があるのだと、サイドは指摘しているのです。

こうして、サイドは、オリエンタリストたちが決して政治とは無縁なものではなく、むしろ西洋の自画像とも絡むことを指摘し、オリエンタリズムを個々の著者と英仏米の三大帝国の政治的関心とのダイナミックな交換として研究するのだと明言しています。

3.2 方法論上の問題

前回申し上げましたとおり、サイドは、イギリス、フランス、そしてアメリカのアラブおよびイスラムをめぐる経験に研究内容を限定しています。「アラブとイスラムこそ、およそ一千年にわたってともにオリエントを代表してきた」(サイド 1993: 49)のであり、イギリスとフランスが、オリエント研究の先駆けであり、第2次世界大戦後、この地位はアメリカが有していることも、前回お話ししました。サイドは、オリエンリズムが西洋文化内で知的権威をもっていたことを分析しようとしているのですが、次に権威をどうやって分析していくのかという問題に直面します。サイドは、権威を分析するにあたって、二つの概念装置を導入します。それが、戦略的位置選定(strategic location)と戦略的編成(strategic formation)です。

3.2.1 戦略的位置関係と戦略的編成

まず、戦略的位置関係とは、「著作家が題材としてとりあげたオリエント的素材に対して彼自身がテキストのなかでいかなる位置を占めているのかを記述する方法」(サイド 1993: 56)のことです。簡単にいえば、著者がオリエントを題材として扱う際のスタンスを分析することです。そして、戦略的編成とは、「テキストのグループ、テキストのタイプ、さらにテキストのジャンルが初めはテキスト群自体のなかで、後には文化全体のなかで、量と密度と参照能力を増していく過程と、テキストの本体との間を分析する方法」(サイド 1993: 56)のことです。これは、複数のテキストが合わさって文献としての信頼度が増していくプロセスを追い、かつ特定のテキストとそのプロセス全体の関係を分析することです。

戦略というコトバを聞いて、なにやら物々しく思った方もいらっしゃるかもしれませんが、ここでサイドが意味しているのは、どうやってオリエントを捉えるかとか、どうやってオリエントにアプローチするかといった、オリエンタリストたちが直面する問題を確認するために用いられています。オリエントについて何か書く——オリエントだけでなく、おそらく他の研究対象でもそうなのかもしれませんが——著述家は書こうとするオリエントと対峙するように、

自らの立ち位置を決めなければなりません。こうして選んだ立ち位置には、テキストで繰り返される著述家の語り口、イメージ、モチーフ、テーマなどがすべて含まれています。そして、これらが合わされることで、テキストの外にある「本当のオリエント」を封じ込め、かつオリエントを巧妙に表象していくのです。これが、戦略的位置関係です。だけど、戦略的位置関係は、単独で発生するものではありません。「オリエントについての何らかの先例、予備知識の存在を想定して、それらを参照しそれらに依拠」(サイド 1993: 57)し、さらには、他の作品、読者、そしてオリエントそのものに寄りかかっています。この三者間関係の集合から、オリエントに関する著作群が編まれていきます。そして、タイミングよく言説と教育機関や外交機関のなかに現れることによって、力と権威を獲得していきます。これが、戦略的編成なのです。

3.2.2 テキストの表層にも注目

サイドは、権威を扱うにあたって、テキストに隠された何かを探そうとしているわけではありません。「テキストの表層すなわちテキストの記述に付随する外在性を分析」(サイド 1993: 57)するのだと述べています。テキストの内容の外側を分析しようとしているのです。サイドは、オリエンタリストを「オリエントの秘めたるものを西洋のために西洋に対してあばく人間」(サイド 1993: 58)だと考えます。オリエンタリストは、実生活でも精神活動でも、オリエントの外側にいます。オリエンタリストたちが生み出したテキストは、オリエントから遠く離れて編まれます。彼らのテキストは、オリエントという「真実」ではなく、オリエントという「表象」なのです。だからこそ力を持つ。そして、こうした、外在性を常に支配しているのは、「彼らは自分で自分を代表することができず、だれかに代表してもらわなければならない」というマルクスのことばが的確に表しているような考え方です。そこで、サイドは、オリエンタリズムのテキスト分析にさいし、オリエントの代替としての表象の形跡に力点を置いています。

こうしたオリエンタリズムにとって、実際のオリエントはむしろ邪魔で、そこから遠く離れているからこそ読者の前に供することができるわけです。オリエンタリズムが成り立つのは、東洋ではなく、西洋のおかげです。西洋のもつさまざまな表象技術によって成立しているのです。こうした表象は、「制度、伝統、慣習、あるいは表現効果を理解するための合意にもとづいた暗号等に依拠」(サイド 1993: 60)していると、サイドは述べています。歴代のオリエントの「科学的」な研究の成果は、学問的な関心の束をつくっていき、それは他方で作家にインスピレーションを与え、「オリエント」なるものが可視化されていきます。ですが、「現実」のオリエントが作家の指針となることはあまりな

かったそうです。

表象技術云々については、ちょっとむつかしいかもしれませんが、卑近な例を用いて、かなり乱暴ですが簡単に説明したいと思います。時代劇ではよく人を切るシーンがあります。主役の侍が刀を振りかぶって、悪役を切ると、キャベツを切ったような音がして、悪役は倒れます。視聴者は、これを悪役が倒された(=死んだ)と理解します。これは、時代劇の撮影の歴史のなかで培われた撮影技術の賜物でしょう。

しかし、実際に侍が人を切るのとは全く違うわけです。おそらく、綺麗に刀を振りかぶることもないでしょうし、一回切ったぐらいで相手はバタンと倒れてすぐに死ぬこともない。血があたり一面に散らばり、刃はこぼれ、両者はとてつもなくひどい状態の凄惨な現場であるはず。ここでいうと、時代劇の役者の殺陣や撮影技術が、いわば表象です。この表象は、実際の侍の切り合いとは違う。現実の外側にあるわけです。外側にあるからこそ、むしろフィクションとして独自のリアリティをもちます。また、時代劇の表象の理解は、視聴者がこれまで見た映画やテレビ、あるいは小説などの「お約束」を共有していることが前提なのです。また、時代劇だからこそ、現代に生きる我々にとっては想像の世界でしかない岡っ引きや同心の活動が、「可視化」されるわけです。だけど、「可視化」された岡っ引きや同心は、決して実際のものではありません。こうした時代劇のフォーマットや話の構成が他の作品にインスピレーションを与え、次々と時代劇が作り出されるということも起こり、また、時代劇についての関心の束が形成されるということもあるでしょう。

話を戻しましょう。西洋の技術によって表彰されるオリエン。そしてそのテキストを生み続けるオリエンタリストたち。サイードは、オリエンタリズムがどのように形作られ、どのような追従者たちがいたのか、そして権威を獲得したのかを研究するだけでなく、さらにはオリエンタリズムが借用したり、あるいは刺激を受けた思想、学説、潮流にも目を向けようとしています。オリエンタリズムとは結局のところ、「著者と著者を引用するシステム」であって、だから、サイードは、「テキストを綿密に解読するという分析方法を用いて、個々のテキストまたは著者と著者の属する複合的・集成的編成とのあいだの弁証法的関係を明らかにしようとしている」(サイード 1993: 64) といっているのです。

3.3 個人的次元

サイードは補足説明の最期に、なぜオリエンタリズムの研究に身を投じるようになったのかを告白しています。それは、サイードの生まれに由来しています。前回ご説明したように、サイードは当時イギリス領だった西エルサレムに生まれ、そこがハガナーの支配地に入るとカイロへ避難し、ヴィクトリア・カレッ

ジに通ってイギリス的な教育を受けています。そして、高等教育はアメリカで受けています。きわめて西洋的な教育を受けていますが、サイードは「東洋人」としての意識ももっていました。こうした個人的なバックグラウンドから、サイードの問題意識は生まれたようです。そして、サイードは自らの研究をこう述べています。「多くの点で私のオリエンタリズム研究は、すべてのオリエンの人々の生活をきわめて強力に律していた文化が、私というオリエンの臣民の上に刻みつけたその痕跡を記録する試みであった。」(サイード 1993: 67-68)

現代のエレクトロニクス時代に入ると、オリエン特観のもろもろのステレオタイプが著しく強められてきたとサイードは指摘しています。画一化と文化のステレオタイプ化が起こっているのです。前回、テロリズムを研究しているという、研究地域は中東なのかとよく尋ねられた私の経験をお話しました。それは、中東は独裁がはびこる地域でそこにはテロリストがいて、他方で自由で民主主義のアメリカや日本、EUなどがあるという単純な図式を持つ人が少なくないということでもあります。そうした画一化とステレオタイプ化によってつくられた人物像は、アメリカや日本、あるいはEUに住む中東にルーツをもつ人たちへ向けられる目を厳しくさせています。

サイードはこういっています。「『東洋人』を創造しつつ、ある意味で人間としての彼を抹殺してやまぬような知識と権力の結びつきを、単なる学問上の問題とのみ考えることはできない。しかしそれにもかかわらず、その結びつきはきわめて明白な重要性をもつ知的な問題」(サイード 1993: 71) なんだと。こうして、サイードは、該博な人文学の知識を駆使してオリエンタリズムを分析していきますが、それではそれによっていったい何をめざしていたのか。サイードは、オリエンタリズムに対する解答はオクシデンタリズムではないと明言しており、オクシデンタリズムを退けています。サイードが目指していたもの。彼自身がこのように述べています。オリエンタリズムの研究が、「オリエンに対する新しい姿の確立に向けての一助となるならば、いやそれどころか「東洋」と「西洋」との双方を一挙に消滅させてしまうことができるのなら……」(サイード 1993: 72) と。つまり、彼は自らの研究によって、オリエンタリズムという、西洋の東洋に対する支配様式を破綻させることを狙っていたのです。

4. 文明の衝突

以上、サイードの『オリエンタリズム』の序説をベースにしてお話しました。サイードの議論のおおまかな枠組みはご説明しましたので、これを手がかりとして、ぜひ『オリエンタリズム』を手にとって読んでいただきたいと思います。

さて、この『オリエンタリズム』が書かれたのは1970年代ですので、当然分

析範囲は1970年代までとなります。では、その後どうなったのでしょうか？彼の著作によって、「西洋」と「東洋」の区分けは破綻したのでしょうか？ そのお話をしたいと思います。

『オリエンタリズム』が刊行されてから20年以上経過し、ある論文が話題を呼びます。当時は、冷戦が崩壊したことが思想にも影響していました。論文を書いたのは、サミュエル・ハンチントンという著名な国際政治学者で、安全保障論などで業績を残している方でした。彼は、外交関係では有名な雑誌である『フォーリン・アフェアーズ』の1993年7月号に、“The Clash of Civilizations?”という論文を載せました。これがかなり話題を呼び、その後、加筆して*The Clash of Civilizations and The Remaking of World Order*(邦訳『文明の衝突』)として刊行しました。「文明の衝突」というコトバを聞いたことがある方もいらっしゃると思います。日本でもかなり話題を呼びました。

では、どんな内容だったのかと申しますと、文明の衝突の中心的なテーマは、「文化と文化的アイデンティティ、すなわち最も包括的なレベルの文明のアイデンティティが、冷戦後の統合や分裂、あるいは衝突のパターンをかたちづけている」(ハンチントン 1998: 21)というものでした。ハンチントンは、国家をグループ分けする場合、東と西および第三世界の3つのブロックですんだ冷戦時代とは異なり、冷戦後に重要なのは、「7つあるいは8つを数える世界の主要文明」(ハンチントン 1998: 23)と考えたのです。ハンチントンが考える世界の主要文明とは、西洋、ラテンアメリカ、アフリカ、イスラム、中国、ヒンドゥー、東方正教会、日本です。文明に根ざした世界秩序が生まれつつあるのだけど、「西欧は普遍主義的な主張のため、しだいに他の文明と衝突するようになり、とくにイスラム諸国や中国との衝突はきわめて深刻」であって、西洋にとって深刻な問題である。だから、西洋が生き残るためには、「非西欧社会からの挑戦にそなえ、結束して、みずからの文明を再建して維持していけるかどうかにかかっている」と、ハンチントンは主張しています(ハンチントン 1998: 21-22)。かなり西洋中心の考え方であり、彼の文明論それ自体に対しても方々から批判がありました。しかし、「文明の衝突」は、冷戦後の世界秩序のパラダイムとして一般に流布し、2001年の9.11事件発生後、日本のビジネス書売り上げランキングに『文明の衝突』が登場するぐらい売れました。9.11事件をハンチントンの枠組みで理解しようとする人が少なくなかったのです。

サイドは、ハンチントンの議論をどう考えたのでしょうか。2001年10月に*The Nation*に掲載されたエッセー“Clash of Ignorance”(邦題:無知の衝突)で、サイドは『文明の衝突』の議論、特にその中のイスラムの議論が、アメリカのオリエンタリストであるバーナード・ルイスの論文に依拠していて、西洋とそ

れ以外の世界の対峙というオリエンタリズムのパラダイムは変わっていないと指摘し、『文明の衝突』は「イカサマの新機軸」だとかなりきびしく批判しました(サイド 2005: 161-170)。サイドがこのエッセーを発表した当時のアメリカの状況は、かなり好戦的かつ反イスラムの風潮が高まっていたので、相当な覚悟で書いたのではないかと思います。オリエンタリズムは、なかなか死なないどころか、「文明の衝突」のようにリバイバルされて、今なお非常に強い力をもちつづけています。サイドの議論を、自分とは関係のないものだと思った方がいらっしやるかもしれませんが、そんなことはありません。さきほどご紹介しましたハンチントンの「文明の衝突」で、世界秩序を本当に理解することは可能なのでしょうか？ また、イスラム、あるいはアジア、それらについて皆さんはどんなまなざしを持っているのでしょうか？ サイドの問題提起は、世界観とか、イスラムとかアジアといった「他者」への認識をするべく問い直すものであり、私たちへの問いかけなのです。その問いの答えは、「批判的にものをみる」という観点から、みなさんの今までの視点が「オリエンタリズム」あるいは「文化のステレオタイプ」にどれくらい影響されているのか考えることからはじまります。ぜひ考えてみてください。

次回ですが、ハンチントンの議論でもでてきた西欧の普遍主義的な主張について、その問題点を分析したイマニエル・ウォーラーズテインの議論をご紹介したいと思います。

引用文献

片桐薫編

2001 『グラムシ・セレクション』平凡社。

川田侃・大畠英樹編

1993 『国際政治経済辞典』東京書籍。

サイド、エドワード・W

1993 『オリエンタリズム 上』板垣雄三・杉田英明監訳、今村紀子訳、平凡社。

2005 「無知の衝突」『オスロからイラクへ——戦争とプロパガンダ 2000-2003』中野真紀子訳、みすず書房、161-170頁。

鈴木富久

2011 『アントニオ・グラムシ——『獄中ノート』と批判社会学の生成』東信堂。

代久二編

1961 『グラムシ選集 1』合同出版。

辻清明編

1956 『岩波小事典 政治 増補版』岩波書店。

ハンチントン、サミュエル

1998 『文明の衝突』鈴木主税訳、集英社。

山崎功

1966 『アントニオ・グラムシ』岩波書店。